
幸子

ミズキシホ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸子

【Nコード】

N7068C

【作者名】

ミズキシホ

【あらすじ】

「復讐のカタチ」の続編。積年の恨み……。

ここまで書くと、俺はペンを置いた。

煙草に火を点ける。

深々と吸い込むと、
長くゆっくりと吐き出す。

さて、これからどういう展開にしようか。
簡単には死なせない。

生きながら、もっともっと苦しんでもらうよ、幸子……。フフ
フフフ……

ここまで打って、
わたしは、パソコンのキーボードから手を離れた。

ゆっくり息を吸いながら、
首をのけぞらす。

首がバキバキと鳴る。

首が痛い、肩もかなりこっている。

終わった……。

早く書き上げたい気持ちと、
この文に向き合うのが嫌な気持ちとが交錯した日々だった。
長かった。
辛かった。

これは、わたしの復讐の物語だ。

何年越しだろう。

5・6年は経つのだろうか。

必ず不幸にしてやると誓い、
毎日、呪詛の念を送り続けた日々。

自ら手を下すつもりはなかった。
作中のあの男のように。

手を出したら負けである。

常に不幸に見舞われている。
いつも運命を嘆いている。

そして、それがさらに、自ら不幸を招くことになる。
そんな毎日にしてやろうと思った。

そして、実際、そうしてやったと自負している。

証拠はない。

根拠はある。

わたしの念がそれほど根深かった、という事実。

ああ、なんと素敵で、芸術的なだろう。

わたしは、一切手を下してはいないのだ。

「幸せにはさせない」と、

念じ続けただけ。

あの当時、

「生涯赦さない」とわたしが心に誓った相手は二人いた。

そのうち一人には、

それはそれはあざやかに、恨みを晴らした。

恐怖に震え、蜘蛛の糸にしがみつく、カンダタを見ているかのように
だった。

あともう少し、というところで糸をプツリだ。

奈落へ落ちるあいつ。

糸を切る絶妙なタイミングに我ながら惚れ惚れした。

その時、わたしは、何ヶ月ぶり、ひよつとしたら何年かぶりに、
心の底から晴れ晴れとした気分になった。

なんと世界は明るいのだろう！

なんと世界は色に満ち溢れているのだろう！

空は青く、空気は軽かった。

一人目復讐完了。

いまだに、目の端に映るのもいやだし、（いまのところ一度もないが）

話題を耳にすることすら嫌悪する。

こうして考えただけで、不快だ。

でもそれは、

おぞましいゲジゲジや、カマドウマを目の当たりにした時と同じ感覚だ。

復讐は完遂している。

いまは、虫けらに感じる嫌悪感程度の気持ちしかない。

しかも、

糸を切る直前まで、

四六時中、呪詛の念を送り続けてやったから、

あいつが幸せになることもない。

これから先、やつの姿を目にすることも、耳にすることもないだろうけれど、

わたしには分かる。

あいつは幸せになれない。

それだけでわたしは幸せだ！

そして、二人目。

そいつの名は「幸子」。

会ったこともないし、見かけたこともない。

でも、誓って、わたしの逆恨みではない。

わたしの空想の産物でもない。

実在する人間だ。

でも、どうだろう、いま、実在してるのだろうか？
していないかもしれない！

先に仕掛けてきたのは幸子だ。

わたしは売られた喧嘩を買っただけ。

一人目と同じように、呪詛の念を送り続けてやった。
間違いなく、いま、現時点でも幸せではないはず。
そして、これから先も。

「幸子」という名。

幸せな子。

笑わせる。

幸せ？ 幸せなのかい？

大笑いだ。

わたしは幸子という名の女を不幸にしてやった。

だが、いまひとつやりきった感がないのは、
幸子が不幸になっているのは間違いないが、
この目でその不幸ざまを見て楽しむことができないこと。

不幸にしてやったという確信はあるものの、
一人目にしてやったような決定打がない。

だから、

いつかきつと必ず、不幸の上塗りをしてやるとあの時誓った。

そして、いま。

あの物語を書いた。

物語の中で、わたしは、

幸子を恐怖のどん底に落とし、

暗闇を這いずり回らせ、

ありとあらゆる様々な手口で苦しめてやった。

どんどん弱っていく幸子。

頼れる者はいない。

幸子を助ける者などいないのだ！

いつかとどめを刺すつもりだったが、

こういうカタチにするとは考えていなかった。

当時、

わたしは幸子の苗字も知っていた筈である。

が、時の流れと共に忘れてしまったらしい。

「幸子」という名だけをしっかりと記憶に刻んで。

こんなことなら、苗字もしっかりと覚えておけばよかった。

いや、フルネームを覚えていたら、

いつかわたしが実際に手を下してしまうのを恐れ、

記憶がわたしに無断で消去してしまったのかも知れない。

あの物語を書きながら、
わたしはニヤニヤしていたに違いない。
楽しくて仕方なかった。

もつと、もつと！

幸子を苦しめる術は、次から次へと湧き上がる。
足りない、まだ足りない……！

反面、

当時の自分の傷に触れることにもなり、
わたしは消耗した。

あの物語は、

諸刃の剣であつた。

わたしは、傷だらけになりながら、あの物語を書き上げた。
わたしが傷つくと、幸子も傷つく。
それでいい。

長い年月をかけたわたしの復讐。

幸子は覚えているだろうか、わたしのことを。

わたしの恨みがこれほど深い、ということを知っているだろうか。

実名を使い、作中で痛めつける。

自分の与り知らぬところで、自分と同じ名の主人公がなぶり者にさ
れ、

晒されている。

幸子の目に入ればいいのに。

わたしの復讐。

書き終えたいま、湧き上がる感情は、
これで溜飲を下げたから復讐は終わり、でもなく、
こんな程度で復讐は終わらない、でもない。

どちらの感情でもない。

「満足」

いつか必ず不幸の上塗りをしてやる、と誓ったことを、
こういうカタチで実行したこと。
成し遂げたことに満足している。
達成感がある。

ニヤニヤしている。

「復讐したこと」ではなく、「成し遂げたことに」満足している。

この先、時間と共に忘れていくのかもしれない。
やっぱり忘れることはできないのかもしれない。

終わりではない、「区切り」。

作中、得意げに滔々と語るあの男はわたしだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7068c/>

幸子

2010年10月25日02時18分発行